



くすりと健康

一般社団法人
神戸市薬剤師会

配合薬

薬局・薬店などで処方せんなしでも購入できる一般用医薬品は、年齢、性別、体質、症状や他の疾患の有無などの違う、いろいろな人が服用するため、副作用が出にくいように、また種々の症状に対応できるように、有効成分を少しずつ複数配合している薬が多いのですが、病院などで医師に処方してもらった医療用医薬品は、基本的にはひとつの錠剤、カプセルなどにひとつの有効成分しか入っていません。それは、一人ひとりの症状や体質に合わせて、薬を組み合わせたリ、量を調節したりするためです。医療用医薬品でも風邪薬などでは以前から一般用医薬品のように複数の有効成分を含み、咳や発熱などさまざまな症状に対応した配合薬はありましたが、最近は血圧を下げる薬など生活習慣病の治療薬にも2種類の有効成分を含んだ配合薬も増えてきています。こ

ちらの配合薬は、種々な症状に対応するのではなく、効果を強めるために同じ薬効の成分を複数配合していることが多く、複数の有効成分が入っている薬を使用することで、2種類以上の薬を別々に使用するよりも、患者さんの使用する薬の数を減らすことができ、さらに値段が安いため、負担する金額も少なくなることがあります。また、これらの配合薬は、新たな特許を取得するため、新薬（先発医薬品）に該当しますが、特許の期間が過ぎると後発医薬品（ジェネリック医薬品）が発売可能となり、さらに安価になった配合薬も発売されています。

医療用医薬品の配合薬の中には、薬の有効成分の量を調節できるように、○○配合錠HDと○○配合錠LDといったように、配合されている有効成分の量を変えて、患者さんの状態に合わせて薬を選ぶことができるようになっています。ただ、副作用がはっきりした時に、どの成分が原因なのか、

原則的に、配合薬のなかに含まれる有効成分をひとつ以上、以前から服用している方に限って、切り替えて使われることになっています。

医療用医薬品の配合薬には、血圧を下げる薬や糖尿病、緑内障、喘息など同じ疾患を治療する成分同士を組み合わせて効果を高める以外にも、血圧を下げる作用のある成分と血中のコレステロールを低下させる作用の成分を組み合わせたリ、血が固まりすぎるのを防ぐ作用の成分とその副作用を防止する作用を持つ成分を組み合わせたリと、いろいろな組み合わせの配合薬も誕生してきています。

医療用医薬品の配合薬は、このような特徴を持っています。もし、病院などでもらった薬のなかに「配合」という文字を見つけたら、その薬には複数の成分が含まれていますので、一度ご自分の薬を調べてみてはいかがでしょうか？

（北区 薬局エビノファーマシー

松本 博志